

星の花が降るころに（安東みきえ）

日下部 真依、口石 梨絵、児玉 萌、清水 愛美



一 作者と作品について

安東みきえは、一九五三年山梨県甲府市生まれの児童文学作家・絵本作家である。一九九四年毎日新聞社主催の小さな童話大賞で大賞を受賞、二〇〇一年に『天のシーソー』で第十一回椋鳩十児童文学賞を受賞した。

その他の作品としては、『どこまでいってもはんぶんこ』や『おじいちゃんのゴーストフレンド』、『頭のうちどころが悪かった熊の話』などがある。

「星の花が降るころに」は、光村図書の中学校国語教科書（一年）に掲載されており、教科書のために書き下ろされた作品である。教科書において、「つながりを読む」という単元の最初に設定されており、現代小説風に書かれているため、子どもたちも親しみやすく、場面展開や登場人物の心情の変化を読み取りやすい作品となっている。

二 叙述について

銀木犀の花は甘い香りで、白く小さな星の形をしている。

銀木犀の説明。冒頭にあることで、物語の重要なポイントであることとを感じさせる。

そして雪が降るように音もなく落ちてくる。

「雪」とすることで銀木犀の白を喩えている。

去年の秋、夏実と二人で木の真下に立ち、花が散るのを長いこと見上げていた。

「長いこと」とは長い間という意味。

気がつくど、地面が白い星形でいっぱいになっていた。

「気がつくど」とあるので、散るのを見上げている間、地面は見えていなかった。長い間見ていたため、たくさんの花が散っている。

これじゃ踏めない、これじゃ もう動けない、と夏実は幹に体を寄せ、二人で木に閉じ込められた、そう言っただけで笑った。

夏実は花を踏みたくないと考えている。木が二人を閉じ込めるため、わざと花をたくさん散らせたという考えをしている。

—ガタン！

—をつけることで、過去形の回想から現実に戻る事を表しているのか。「！」があることで、聞こえたのが大きい音であることを表す。

びっくりした。

主人公の感情であるが、地の文であることから、声に出していない。

去年の秋のことをぼんやり思い出していたら、机にいきなり戸部君がぶつかってきた。

「ガタン！」という音の原因が説明される。「ぼんやり」とあるので、なんとなく思い出していた。目的があつて思い出していたわけではない。「いきなり」とあるので、前触れもなく、突然ぶつかってきた。

戸部君は振り返ると、後ろの男子に向かってどなった。

ぶつかってきたはずの戸部君が怒っている。

「やめるよ。押すなよなあ。おれがわざとぶつかったみたいだろ。」

「わざと」とあり、意図的にぶつかろうとして行動したということ。

戸部君はわざとぶつかったのではないと主張している。

自習時間が終わり、昼休みに入った教室はがやがやしていた。

「がやがや」とは大勢が勝手にうるさく話し合うさま。

わたしは戸部君をにらんだ。

わざとでなかったとしても、「わたし」は「戸部君」を不快だと感じていることが分かる。「にらんだ」とあるので、むっとした表情で、じろつと眉間にしわをよせる様子で戸部君を見た。

「なんか用？」

挨拶もなく、要件をせかしていることから「わたし」の苛立ちが読み取れる。

「宿題をきこうと思って来たんだよ。そしたらあいづらがいきなり押してきた。」

「そしたら」と、聞かれてもいないぶつかった理由を加えて説明している。「戸部君」は「わたし」の不機嫌を感じて言い訳をしている。わたしだつてわからない。

「だって」は同様の意味。

いっしょだった小学生のころからわからないままだ。

「小学生のころから」とすることで、「わたし」が考えているのは「あたかも」の意味ではないことが分かる。

なんで戸部君はいつもわたしにからんでくるのか。

「わたし」が考えているのは、「あたかも」を用いた問題ではなく、戸部君の不可解な行動についてである。「いつも」とあるので、二度や三度の出来事ではない。

なんでサッカー部なのに先輩のように恰好よくないのか。

「わたし」の頭の中には恰好よいサッカー部の先輩が思い浮かべられている。

「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」

「そんなの」と問題を取るに足らないものとしている。

隣の教室の授業も終わったらしく、いすを引く音がガタガタと聞こえてきた。

初めて隣の教室の様子が分かる。

わたしは戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。

椅子を引く音が隣の教室から聞こえてきたすぐ後に立ちあがっていることから、立ち上がったことと隣の教室の状況が関係していると分かる。「押しつけるように」とあるので、立ち上がるのに戸部君が邪魔だった。

戸部君にかかり合っている暇はない。

「暇」とすることで、時間がないこと、「わたし」が焦っていることが分かる。

今日こそは仲直りをすると決めてきたのだ。

「わたし」が誰かと喧嘩をしていることが分かる。「今日こそ」としているため、何度か仲直りに失敗している。

はられたポスターや掲示を眺めるふりをしながら、廊下で夏実が出てくるのを待った。

「ふりをしながら」なので、本当は眺めていない。「夏実」を待っているの、喧嘩をしている相手は「夏実」であることが分かる。

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。

これまで二人は親友だった。「約束していた」と過去形であることから、今では違うのかという想像をさせる。「とは」とあるので、夏実とだけ約束した。他の友人とは違う特別な関係であることがわかる。

それなのに、何度か小さなすれ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。

「何度か小さなすれ違いや誤解」ということから、思春期の難しさゆえに、理由はないがなんとなく二人が離れていったのではないかと考える。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそとまでた。

「お守りみたいな」や「そとまでた」などの表現から、「わたし」はこの小さなビニール袋をとても大切にしていることがわかる。「みたいな」というのは、ビニール袋がお守りの形や大きさと似ているという意味なのか、それともビニール袋をお守り代わりに大切にしているという意味なのか。ここでは後者だと考えたい。

もう香りはなくなっているけれどかまわない。

「かまわない」とあるので、銀木犀の香りではなく、その花に込められている「何か」を大切にしていることがうかがえる。その「お守りみたいな」ビニール袋自体を大切に思っているのではなく、夏実とわたしの間の架け橋になることを信じているのではないか。

香水はもう無理でも試しにせっけんを作ってみよう、そして秋になったら新しい花を拾って、それでポプリなんかも作ってみよう……そう誘ってみるつもりだった。

「挑戦できなかったことに誘うことで、前のような二人に戻ることができるのではないかと考えている。」

夏実だって、わたしから言い出すのをきっと待っているはずだ。

お互いが相手から言い出すのを待っているのであれば、私から言うという決意の表れであり、自分を勇気付けている。「きっと」とあり、確信しているが、特に根拠があるわけではない。夏実も仲直りしたいと思っっているということを、自分に言い聞かせている。

そのとたん、わたしは自分の心臓がどこにあるのかがはっきりわかった。

心臓の場所がわかるほど、胸が高鳴っているということ。「はっきり」とあるので、心臓の位置を意識した。それくらい緊張している。

夏実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながらわたしからずっと顔を背けた。

「わたし」が話しかけたことに「夏実」は気がついたものの、なんとなくの気まずさゆえに「隣のクラスの子」を優先してしまった。夏実は「わたし」ほど「わたしとの関係」を元に戻したいとは思っていないのかもしれない。「とまどったような」とあるので、どう振る舞ったらよいか分からず困った様子。「ずっと」とあり、自然な様子で顔を背けた。

そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。

結局「夏実」は「わたし」に気付いていないふりをしてしまった。

音のないコマ送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

「夏実」に無視をされたショックから長く感じている。「変に」とあるので、普段は感じないような長さだった。コマ送りというのは非常にゆっくりとしたことの例えである。

騒々しさがやつと耳に戻ったとき、教室の中の戸部君がこちらを見ていることに気づいた。

「やつと」とあるので、しばらく呆然としていた。「耳に戻った」とあり、耳に騒音が聞こえるようになった。はっとした。戸部君に今の出来事の一部始終を見られていたのではないかと思っっている。

唇がふるえているし、目の縁が熱い。

今にも「わたし」は泣きそうになっている。戸部君に見られていたという恥ずかしさもあると考えられる。

きまりが悪くてはじかれたようにその場を離れると、窓に駆け寄って下をのぞいた。

戸部君に見られていたということを気にしており、恥ずかしさのためその場から離れた。「はじかれたように」というのは、おはじきのように飛ばされるイメージである。誰とも顔を合わせたくなかったのではないか。

どこも強い日差しので、色が飛んでしまったみたい。

「色が飛んでしまった」とあり、太陽に照らされ、色がわからないほどまぶしい状態。

貧血を起こしたときに見える白々とした光景によく似ている。

「わたし」は貧血を経験したことがある。夏実とのやりとりがそれほどショックだったということ強調している。外の明るさと廊下の暗さの差が強調されている。

わたしは外にいる友達を探しているふうに熱心に下を眺めた。

「探しているふうに」とあることから、実際は探していない。端から見て、わたしがなぜ窓の外を眺めているのかがわかりやすいように、あえて「友達を探している芝居」をしているのではないか。

本当は友達なんていないのに。

これは二通りの考え方がある。

一つは、前文の「わたしは外にいる」にかかり、「本当は『外には』友達なんていない」という意味である。

もう一つは、後ろの文にかかり、「本当は夏実以外の友達がいない」という意味である。こちらで考えると、「わたし」は友達付き合いが苦手、もしくは夏実に依存していたのではないかと考えられる。

夏実のほかには友達とよびたい人なんてだれもないのに。

「夏実」を大切に思っているというプラスの面がある一方で、夏実に依存しているということもうかがえる。「なんて」とあるので、わた

しは夏実の他に友達を作ろうとは思っていないことがわかる。

もう九月というのに、昨日も真夏日だった。

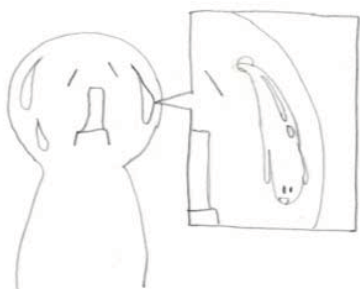
「もう」とあることから、暑いということへの嫌悪感がみられる。また、昨日も、とあるので昨日に引き続き今日も、暑い日であることが分かる。

真夏日とは、最高気温が三十度以上の日を言う。

校庭に出ると、毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそうに暑かった。

どれほど暑いかというのを、「毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそう」という比喻を使って説明している。頭がボーっとして気持ちしがやきっとしない、どうしようもないくらいの暑さが想像出来る。

「ぬるぬる」という言葉には、「さらさら」にあるような清涼感はなく、また「どろどろ」というような粘り気、また汚さというイメージもなく、液体が流れ出てまわりつくようなイメージがある。



運動部のみんなはサバンの動物みたいで、入れ替わり立ち替わり水を飲みにやって来る。

次々と水場へやってくる運動部の部員たちを、サバンの動物に例

えている。

「やって来る」とあるので、「わたし」は水飲み場の近くにいることが分かる。

夏実とのことを見られたのが気がかりだった。

昼休みの夏実とのすれ違いを見られたことを気にしている。

繊細さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言いだすか知れたものじゃない。

「みんなの前で」とあるので、他のクラスメイト達に、夏実との仲が上手くいっていないのを知られることを気にしている。

「知れたものじゃない」とあるので、予想もつかない。戸部君のことを信用していない事が分かる。

どこまでわかっているのか探っておきたかった。

実際に夏実との様子を見られてしまった以上、隠すことも出来ない。次に気になるのは、彼がどこまでを察して知っているのか、ということであった。

だいたいなんであんな場面をのんびりと眺めていたのだろう。

「あんな場面」とは、昼休みに夏実を待ち伏せしたものの、すれ違ってしまった場面である。

「のんびりと眺めて」といると感じたのは「わたし」であり、戸部君の心境は分からない。

それを考えると弱みを握られた気分になり、八つ当たりとわかってもらいにくくしかたがなかった。

夏実との仲が上手くいっていないことは、「わたし」にとっては弱みであることが分かる。

また、「八つ当たりと分かっても」とあるので、実際戸部君には何の関係も無いのだが、他に苛立ちを向けようが無く、彼に対して八つ当たりをすることによってごまかしている。「にくらしくて」とは、憎悪という意味の憎いではなく、しゃくにさわる、腹が立つ、という意味である。

戸部君の姿がやっと見つかった。

「やっと」とあるので、しばらくの間校庭を見渡して戸部君を探していたことが分かる。

サッカーボールは縫い目が弱い。

友情もサッカーボールと同じようにほころびやすいものだ暗示しているようにも感じられる。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、黙々とボールみがきをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがひどく小さく、くだらないことに思えてきた。

「黙々と」とあるので、おしゃべりをしたり、怠けたりせずに取り組んでいる。真夏の炎天下で他の人がサッカーの練習をしている中、黙々とボールをみがく戸部君は、人が嫌がることに進んで取り組み、また物を大切にする真面目な人物だと捉えることができる。そんな戸

部君を見て、「わたし」の戸部君に対する見方が変わった。「なんだか」とあるので、「わたし」にも理由は分からない。「急に」とあるので、前触れもなく突然思えた。「思えてきた」と「思えた」とを比べると、「思えてきた」には、段々と思うことができるようになった、という意味がある。しかし「急に」なので、ゆっくりとはなくてどんどん思えてきた。

「自分の考えていたこと」とは、繊細さのかけらもない戸部君がみんなの前で何を言うか気が気でないということである。丁寧にボールをみがく彼を見て、彼はそんな人ではないと分かった瞬間、自分の考えが間違っていると気付いた。あるいは、夏実との関係のことを指していると考えられることもできる。しかし、この段階では夏実のことは未解決であり、くだらないことだとは思っていないはずである。

溶け出していた魂がもう一度引つ込み、やっと顔の輪郭が戻ってきたよ
うな気がした。

溶け出していた魂とは、暑さで、毛穴という毛穴からぬるぬると溶け出していた魂である。顔の輪郭が戻るとは、冷たい水に触れることにより、空気と自分の体との境界がぼんやりとしていた感覚がはつきりしたことの喩えだと考えられる。

ずっと耳になじんできた声だからすぐわかる。

「ずっと」とあるので、長い間、いつも。小学生から一緒の学校で、塾も同じなので、戸部君とはずっと一緒にいる。そのため、顔を見なくても声で彼だと分かった。

ハンドタオルから目だけを出して戸部君を見つめた。

目だけを出すという記述は夏実に無視された場面を見られたという気まずさと、どんなことを言われるのかという不安とから、しっかりと戸部君と向き合えないことを表している。

「ほら、『あたかも』という言葉を使って文を作りなさいってやつ。」

わたしが心配していたことは全く無関係の話題である。おそらく戸部君がわたしに気を遣ってあえて夏実の話題を避けて、この話題で話しかけてきたのだと考えられる。

にやりと笑った。

間をとることで、ギャグをより効果的にしようとしている。また、自信を表していることとすることもできる。「にやり」とあるので、声を出さず、表情だけで笑った。口元の口角を上げるような笑い方。

「あたかもじゃない。」

あえてギャグを言っただけをリラックスさせようとする戸部君の不器用な優しさが読みとれる。

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

こんな時にくだらないギャグを言ってきた戸部君にあきれている。同時に、戸部君の優しさに気付いて、普段との違いに困惑している。「わけがわからない」とあり、こんなことを言う理由が「わたし」には分からない。しかしプラスの意味をふくんでおり、これを境に戸部君に対する私の印象が「いいやつ」に変わっている。

中学生になってちゃんと向き合ったことがなかったから気づかなかつたけれど、わたしより低かったはずの戸部君の背はいつのまにかわたしよりずっと高くなっている。

「中学生になって」ということは、小学生のときは仲が良くきちんとして向き合っていたということか。もしくは、中学生になって異性として意識し始めたため、中学生独特の男女の隔たりがあったとも考えられる。「ちゃんと」とあり、相手に関心を持って向き合うということ。中学生になっても向き合っていたが、戸部君に関心をもって向き合っていないなかった。

わたしを気遣って声を掛けてくれた戸部君の成長を感じ、男らしく頼もしく感じている。

わたしはタオルを当てて笑っていた。

涙もしくは顔の表情を見られないようにするためだと考えられる。

涙がにじんできたのはあまり笑すぎたせいだ、たぶん。

戸部君の優しさに触れてあふれてきた涙を笑いのせいだと納得させることで、自分の気持ちをごまかそうとしていると考えられる。「たぶん」とあるので、本当にそうだとはいえない。「わたし」は思っていない。しかし涙の理由をつきつめようとも思っていない。

学校からの帰り、少し回り道をして銀木犀のある公園に立ち寄った。

二人の思い出の場所に行くことで、気持ちを切り替えようとしている。

銀木犀は常緑樹だから一年中葉っぱがしげっている。

わたしにとって、いつも葉っぱが変わらず茂っている銀木犀はずっと変わらない存在であると考えられる。

それをきれいに丸く刈り込むので、木の下に入れば丸屋根の部屋のようにだ。

「部屋のよう」とあるので、わたしにとって落ち着く空間だということがわかる。

夏実とわたしはここが大好きで、二人だけの秘密基地と決めていた。

二人の信頼関係の象徴である。

ここにいれば大丈夫、どんなことから木が守ってくれる。

実際は守ってくれなかったし、時間は流れ、わたしと夏実の関係は壊れてしまった。

そう信じていられた。

小学生の時の純粹だったころを思い出して、あの頃のほうがよかったと思っている。「いられた」と「いた」とを比べると、「いられた」には、自然と信じたのでなく、信じようと思った結果、信じることでできたという意味が分かる。今は信じようと思っても信じることができない。

木の下は陰になって涼しかった。

わたしを癒してくれる存在。

掃除をしているおばさんが、草むしりの手を休めて話しかけてきた。

おばさんが話しかけたくなるほど、わたしは真剣に銀木犀の木を眺めていたということだろうか。

どんどん古い葉っぱを落つこととして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。

わたしにとって変わらない存在であった銀木犀も変化していたということを知った。「どんどん」とあるので、次々と葉っぱを落とすとした。

でなきやあんた、いくら木だつて生きていけないよ。

木だつて生きていけないということは、人間はもつと生きていけないということを類推させる。

わたしは真下に立つて銀木犀の木を見上げた。

「見上げた」とあるが、わたしの銀木犀の見方が、変わらないものから変化するものへと変わっている。

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

わたしの視点が変わったことにより、今までと同じ景色なのに美しく新鮮に見えた。

ポケットからビニール袋を取り出した。

夏実との思い出と向き合おうとしている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にはらばらと落とした。

過去の思い出との決別を表している。

ここでいつかまた夏実と花を拾える日がくるかもしれない。

新しい二人の関係が始められるかも知れないと信じている。

あるいはそんなことはもうしないかもしれない。

未来はどうなるかわからない。

だいじょうぶ、きつと何とかやっつけていける。

わたしと夏実の関係について悩んでいたことからふっきれている。「きつと」とあるので確信している。

わたしは銀木犀の木の下の下をぐぐつて出た。

過去のことは思い出として、新しい未来へ向かって生きる決意が表れている。

三 考察

(一) 戸部君に対するわたしの心情の変化した場面とその理由

わたしだつてわからない。いっしょだった小学生のころからわからないままだ。なんで戸部君はいつもわたしにからんでくるのか。なんで同じ塾に入ってくるのか。なんでサッカー部なのに先輩のように恰好

よくないのか。

↓わたしにとって、戸部君は理解できなくて、ただただうっとうしい存在である。

繊細さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言い出すか知れたものじゃない。どこまでわかっているのか探っておきたかった。

↓デリカシーのかけらもなく、信用できない性格である、というのが戸部君へのわたしの印象である。

だいたいなんであんな場面をのんびりと眺めていたのだろう。それを考えると弱みを握られた気分になり、八つ当たりとわかってにもにくらしくてしかたがなかった。

↓戸部君の行動が無性に腹立たしい。

なかなか探せないはずだ。サッカーの練習をしているみんなとは離れた所で、一人ボールをみがいていた。

サッカーボールは縫い目が弱い。そこからほころびる。だからグリスをぬってやらないとだめなんだ。いつか戸部君がそう言っていたのを思い出した。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、ボールみがきをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがくだらないことに思えてきた。

ずっと耳になじんでいた声だからすぐわかる。

↓戸部君の耳慣れた声に、親しみを感じている。

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

↓不器用な戸部君の優しさに気付き、今までとの違いに困惑している。

二人で顔を見合わせてふき出した。

↓心が通じ合った

わたしより低かったはずの戸部君の背はいつのまにかわたしよりずっと高くなっている。

↓私の目に、戸部君が頼れる男の子として映った。

☆戸部君に対するわたしの気持は、夏実のことで頭がいっぱいだったこともあり、最初は戸部君の行動が理解できず、うっとうしく目ざわりな存在であった。しかし、戸部君が一生懸命サッカーボールを磨いている姿を見て、彼の普段は見せないひたむきな姿に気づいたことがきっかけで、戸部君としっかり向き合えるようになったと考える。

(二) 夏実との関係についてのわたしの心情の変化した場面とその理由
わたしは戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。戸部君にかかわり合っている暇はない。

↓夏実と仲直りしたくて、必死でそのことしか見えていない。

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。

↓二人の特別な関係をずっと続けると約束し合っていた。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそっとなでた。

↓二人の思い出の品を大切に持っている。

音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

↓夏実が無視されたことによりかなり動揺している。

本当は友達なんていないのに。夏実のほかには友達と呼びたい人なんてだれもないのに。

↓「夏実を大切に思っている」という非常に強いわたしの思い。

「え、葉っぱはずっと落ちないんじゃないんですか。」

「まさか。どんだん古い葉っぱを落っことして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。そりゃそうさ。でなきゃあんた、いくら木だって生きていけないよ。」

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

↓新しい発見に世界の見え方が変わって、輝いて見えている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にはらばらと落とす。

↓過去の決別

ここでいつかまた夏実と花を拾える日が来るかもしれない。それとも

違うだけかと捨てるかもしれない。あるいはそんなことはもうしないかもしれない。どちらだっていい。大丈夫、きっとなんとかやっていける。

↓夏実との関係にこだわることをやめ、未来が何の約束もない不確かな変化に富んだものであるということを受け入れ、希望を見出そうとしている。

わたしは銀木犀の下をくぐって出た。

↓過去のことは思い出として、新しい未来に向かって歩き出した。

☆最初は、わたしは夏実との友情に執着し、必死で仲直りしようとしている。しかし、ずっと変わらないと思っていた銀木犀の葉っぱも毎年の生え換わっているのだと知ったことにより、わたしを支配していた、夏実との友情の形が変化してしまふことを恐れていた気が持がふっきたように思う。

